

平成 23 年 10 月 28 日

各 位

会社名 株式会社ウェッジホールディングス
代表者名 代表取締役社長 田代 宗雄
(コード 2388 大証 J A S D A Q 市場)
問合せ先 執行役員経営管理本部長 浅野 樹美
(TEL 03 - 6225 - 2207)

タイ洪水被害の当社グループへの影響について (第 5 報)

当社の連結子会社である Group Lease PCL (以下、G L) における、この度のタイ国内での洪水発生に伴う影響に関しまして、平成 23 年 10 月 28 日朝の時点で確認されております事項をご報告いたします。

記

1. G L 本社近辺について

G L 本社近辺につきましては、通常通りの営業を行うことのできる状況です。
(G L 本社ビル)



2. G L アユタヤ支店近辺について

G L のアユタヤ支店の状況につきましては、すでに平成 23 年 10 月 20 日にお知らせいたしておりますように営業停止の状況にあります。同支店自体の人的・物的被害はないことを確認しております。

新しい報告が入った場合にはお知らせいたします。

3. G L その他の支店

タイ最大の工業地帯であります、イースタンシーボード地域 3 支店、タイ東北地方のナコンラチャシマ県 1 支店につきましては、洪水の影響はなく、今後とも影響を受ける可能性は低いと現時点では判断しております。

4. バンコクの状況について

バンコク全体において、様々な地区において浸水が起きております。特に川の周囲、運河の周

困など標高の低い地域が浸水をしております。政府は懸命の努力をしておりますが、一進一退を繰り返しつつ、徐々にバンコク各所において水位が増しております。したがって、市内の全域において浸水が起こる可能性があります。特に本日午後8時ごろタイ湾が大潮を迎えます。本日より5日間程度満潮時に潮位が高い状況が続きますので、特に夕刻より深夜にかけて水位が上昇すると考えられます。

5. GLの状況について

25日のマネージメント会議については既にお知らせいたしました。この数日間に浸水が起こり、大きな影響が出ることを想定して社内体制を構築しております。当社には社員数名が宿泊して待機するほか、当社会長の此下竜矢を含め役員、マネージャーも即応できる体制を整えております。また、一昨日より、顧客の使用中のオートバイの一時保管（浸水に備えて高所に保管）場所を設けました。

(浸水に備える高台)



当社会長此下竜矢よりの報告

1. GL本社より約10キロにあります、ドンムアン空港（旧空港）前のVipawadi通りは2日間で約4キロメートル浸水が広がっていることを確認しました。GL近辺においては、以前よりお伝えしておりますプラパー運河の水位は若干低下し、ドンムアン空港前のVipawadi通りの浸水は、昨日夕刻よりやはり若干低下しております

(Vipawadi通りの浸水状況)



2. 市内は晴天が続いており、洪水対策に幸運をもたらしております。
(GL本社付近の寺院、晴天が続いている状況)



3. タイ政府の従来の洪水対策は水そのものを一定の地域に侵入させないというものでした。しかしながら、防衛線はアユタヤ地方工業団地、バンコク全域、バンコク中心部と徐々に後退しながら縮小しております。

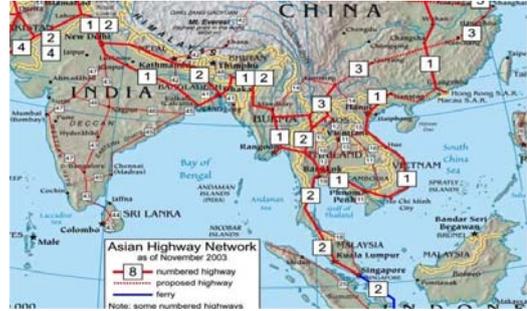
ここ数日の首相はじめ政府関係者のコメントを追いますと、水の浸入を防ぐことから、バンコクに一定の浸水を許容し、できるだけ早く水を海に流してしまうという作戦に切り替えつつありま

す。GLといたしましても、当該方向性を注視し、柔軟に対応できる用意をしております。

4. 浸水が伝えられますアユタヤ地方には中国よりシンガポールまで続く、アジアハイウェイ2号線（南北経済回廊）が通っております。これは同時にアジアならびにタイの物流の大動脈の一つとなり、中国沿岸部からベトナム、インドへと続く、アジアハイウェイ1号線（東西経済回廊）と、バンコクにて交差しております。

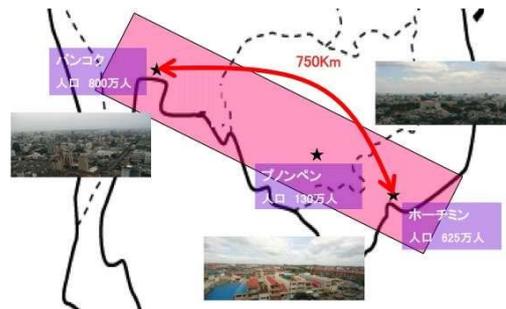
(アジアハイウェイ地図)

現地報道によりますと、当該アジアハイウェイ2号線が、アユタヤ地方から北方へ向かう方向に車の通行が可能になったとのこと。洪水が範囲を拡大しているのではなく、下流（バンコク）に移動してきている様子がうかがえます。なお、アユタヤの北方にあり、タイ中部の都市ナコンサワンでは水位が大幅に下がり、復興が始まっているとのこと。



(東西回廊地図)

また、アジアハイウェイ1号線（東西回廊）は、近隣ではベトナムのホーチミン、カンボジアのプノンペンそして、タイのバンコクをわずか700キロの距離で結んでおります。この東西回廊は問題なく通常通りの運航がされております。なお、東西回廊上にはスワナプーム空港（新空港）やタイ最大の工業地帯イスタンシーボードが位置しており、GL社の大きな拠点となっております。当該地域の3支店は通常通り営業しております。



5. バンコク市内においてGL社のリースを取扱い、顧客の窓口となっているオートバイディーラーですが、浸水が激しくない地域においては通常通り営業をしております。

(通常営業中のディーラーの状況)



(チャオプラヤ川の防水堤)

(チャオプラヤ川の水門)

6. チャオプラヤ川沿いの地区において浸水を確認いたしました。すでに、川沿いの家屋等は浸水しており、臨時の防水堤はその内側の道路などに作られております。



タイにおける洪水は、すでにご報告いたしましたように、増水というべきものです。各地区の標高の低い場所から順に増水します。バンコクは400キロ以上の平野部を流れるチャオプラヤ川の河口にあたり、元来低湿地と運河、河川によって形成された都市です。

そのため、現在においても道路沿いには必ず一定の水路（運河）が設けられており、多くの道路は元の運河を埋め立てたものとなっています。道路の構築にあたっては、多くの場所で大きな水路の建設を義務付けられています。このことはもともとバンコクが浸水しやすく、洪水の影響を受けやすい都市ということが言えます。

本日のラジオ放送において、女性アナウンサーが以下のように話していました。

「水があふれてもあまりドタバタしないようにしましょう。あっちで水が出た、こっちで洪水だと騒がないで、何センチ浸水したのか？どれくらいの場所が水に浸かったのか？冷静に話すようにしましょう。

私たちタイ人はずっと水と暮らしてきたじゃないですか。アユタヤ時代（西暦1600年ごろ、日本の武士、山田長政がアユタヤ王朝に仕えたことは有名。）からずっとじゃないですか。」

と話していました。

水の浸入は、それぞれの水路や、低湿地において徐々に始まります。浸水状況は各地区において水路に沿って、網の目状に広がります。報道では〇〇地区に1メートルの浸水、となると、その地区全域が水に沈んだように聞こえます。実際には、水が深いところで1メートルに達したということであり、そのすぐ横には浸水していない場所があるのが実情です。

特に道路沿いには必ずと言ってもよいほど水路がありますので、水が道路を覆い尽くすことが多く、まるでアナウンサーの言う遠い昔の、タイ人が運河を船で移動していた時代に戻ったような光景が起こります。

(増水したVipawadi 道路で投網する市民)

タイでは、毎年、小規模でもいたるところで、増水が起こりますから、タイ人には一定の免疫があります。増水した場所では、必ず釣竿や投網を持って魚を取る人、水に飛び込んで遊ぶ子供、水際に夕涼みする人が現れます。「洪水」という災害のイメージとかけ離れた光景が広がります。



(橋の上から魚を狙う市民)



(増水した水でオートバイを洗車する市民)



(増水した水で遊ぶ市民)



(タンクを船に改造する市民)



ただ、アユタヤ時代と違うのは、近年のバンコクの都市化により、運河が急速に埋め立てられ、道路に代わってきています。広大な穀倉地帯はコンクリートの住宅に、葦の生えていた低湿地は高層ビルに代わりました。このため、従来、バンコクの町全体が水ガメのような役割を果たしていたのですが、この能力が激減したことでしょう。

前出のアナウンサーは続けます。

「家に水が入ってきても、誰かに怒ったりしないようにしましょう。政府の人たちも、警察の人たちも、軍の人たちも、みんな力をすべて尽くして働いています。昨日の夜もみんな寝ずに頑張っています。誰かに文句を言うのではなく、タイ人みんなで助け合ってこの洪水を乗り切りましょう」

バンコク都民の間でも、不安の時期は通り過ぎ、現実を受け入れようとしているように見えます。

「前の洪水の時に（1995年バンコク市内全域が2か月間水害にあったとされている）はバンコクに水流したけど、なんてことなかったよ。無理に止めるからひどくなるんだよ」あるタイ人の友人が私に語った言葉です。地元テレビもすでにそんな論調になりつつあります。

実際、タイ経済は1995年の大洪水を経たその後も成長し続け、1997年まで一気に成長し、一つのピークを形成します。さらに現在まで大きく発展しました。1995年の経済成長率は洪水にもかかわらず、9.4%と好調でした。当時1,680億ドルだったGDPは、2009年には2,630億ドルと15年間に5割も上昇しています。

現在ではバンコクとその周囲のメガシティは先進国並みの可処分所得15,000ドルに達しているといわれています。バンコク都民がさほど深刻でないのも、この歴史に対する自信かもしれない

ん。

タイの政府もバンコク都民もバンコクに水を引き込むことを前提に、合意が形成されつつあるように見えます。その場合においても、GLの業績への影響は限定的であり、短期的なものになると判断しておりますが、今後とも、GLの業績への影響を見極めるとともに、影響の最小化、業績伸長につながるよう、注力してまいります。

また、新たな情報等がありましたら、投資家の皆様、市場関係者の皆様にご報告申し上げます。

なお、先日から掲載している写真につきましては、すべて当社会長の此下竜矢が現地にて撮影したものです。

以 上